

高尾山におけるムササビの生態研究と 普及啓発活動への利用

2014年

井上 太志

自然観察活動チーム Wild Lives Watchers 代表

共同研究者：御手洗 望 自然観察活動チーム Wild Lives Watchers

目 次

はじめに

1. 研究の背景

- ① ムササビとは
- ② 高尾山のムササビを取り巻く近年の状況

2. ムササビの生息状況調査

- ① 調査方法
- ② 調査結果
 - (ラインセンサス調査)
 - (定点観察調査)
- ③ 考察
 - (ラインセンサス調査)
 - (定点観察調査)
 - (影響度)

3. ムササビの普及啓発活動への利用

- ① ムササビ観察会開催とプログラムへの調査結果運用と検討

4. 提言

- ① 観察会のあり方について
- ② 観察会の主催者に

5. 謝辞

参考文献

高尾山におけるムササビの生態研究と普及啓発活動への利用

～Ecological study about *Petaurista leucogenys* on Mt.Takao
and its Popularization～

Futoshi Inoue 井上 太志
Nozomu Mitarai 御手洗 望

キーワード : ムササビ, ムササビ観察会, 高尾山, 普及啓発
Key : Giant squirrel, Watching program about Giant squirrel,
Mt.Takao, Spreading Enlightenment

はじめに

著者は、2010年より八王子市高尾山を中心に、市民を対象としたムササビの観察会の開催、運営に付随する生息状況調査を行ってきた。東京都内において有数のムササビ生息地と知られる高尾山には、全域的に多くのムササビが生息しているが、今日の観察の際には赤色フィルムをつけないライト点灯や大声での会話など不適切な観察が目立ってきた。本調査研究では、そのような不適切な観察が個体に与えている影響を評価するとともに、得られた情報を元にした観察会の開催、観察マナーパンフレットを作成することで野生動物の観察マナーを提言することを主な目的とする。



図 1 ムササビ

Petaurista leucogenys

1 研究の背景

①ムササビとは

本調査地におけるムササビはいわゆるニッコウムササビ (*Petaurista leucogenys nikkonis*) と呼ばれる信州以北の本州に生息する亜種であり、完全夜行性のリス科哺乳類で大きさは頭胴長 27-49cm、尾長 28-41cm、体重 495-1,250g、前後足の間にある大きな皮膜を利用し滑空することが特徴である。

食性は多岐に渡り、スギの葉や花粉、カシ類の堅果、カエデ類の翼果などを利用するため、生息環境には針葉樹から落葉広葉樹、常緑広葉樹など豊富な植生が見られる。

本種は、東北、関東、近畿、中国、九州各所において準絶滅危惧以上のランクに指定されており、特に東京都においては絶滅危惧 I 類に指定されている。

②高尾山のムササビを取り巻く近年の状況

本調査地である高尾山薬王院及び周辺は東京都八王子市の南西部に位置する頂上の標高が 599m の山地であり、国定公園に指定されている。調査地にはカシ類等の常緑樹を中心とした暖温帯系の照葉樹林帯と、冷温帯系の落葉広葉樹林 (ブナ・イヌブナ・ホオノキ等の落葉広葉樹)・中間温帯林 (モミ・ツガ等の針葉樹) の境界に位置するため植生が豊かであり、都市部に近い山地としては極めて重要な環境を維持している。

全国的に有数のムササビ生息地として有名な本調査地では 1970 年頃から多くのムササビ観察会が開催されてきたが、近年の急激なマスメディアの発展に、個体に配慮した一定の観察マナーが十分に浸透しないまま観察が行われているのが現状である。そのような不適切な観察が個体に与えている影響を評価し、観察マナーを提言及び普及啓発するための基礎情報収集を目的とし、2013 年度に生態調査を実施した。

2 ムササビの生息状況調査

①調査方法

本調査では、定点観察調査、ラインセンサス調査の2種類の手法を用いて調査を行った。両調査手法ともに2013年4月～2014年3月の12ヶ月間に、ラインセンサス調査18回、定点観察調査21回を実施した（うち5月は諸事情により調査非実施）。

定点観察調査は、日没前後1時間を基本調査時間とし、情報のある巣穴（全9箇所）付近に定点を3ヶ所設定、確認された鳴き声、個体の目撃情報を記録した。特に巣穴からの出巢が確認された場合、その時間も記録した。

ラインセンサス調査は、定点観察調査後、時速1～2km程度で一定のルート歩き、左右各25mの範囲での鳴き声、個体の目撃情報を記録した。いずれの調査手法においても、鳴き声や個体の確認位置、方向、時間により重複している可能性のある情報については記録を控えた。

また、各調査手法において、観察による個体への影響を評価するため、独自に個体の動向から3段階のレベルで記録を行った（表1）。

表 1

観察による影響評価レベル	
0	個体に目立った反応はなく、自然に行動する。
1	個体に若干の反応有り。観察者を注視、あるいはライト点灯に対し顔を背けるなどの忌避行動をとる。
2	個体に反応有り。驚いて急に巣穴に入るなどの明瞭な忌避行動をとる。

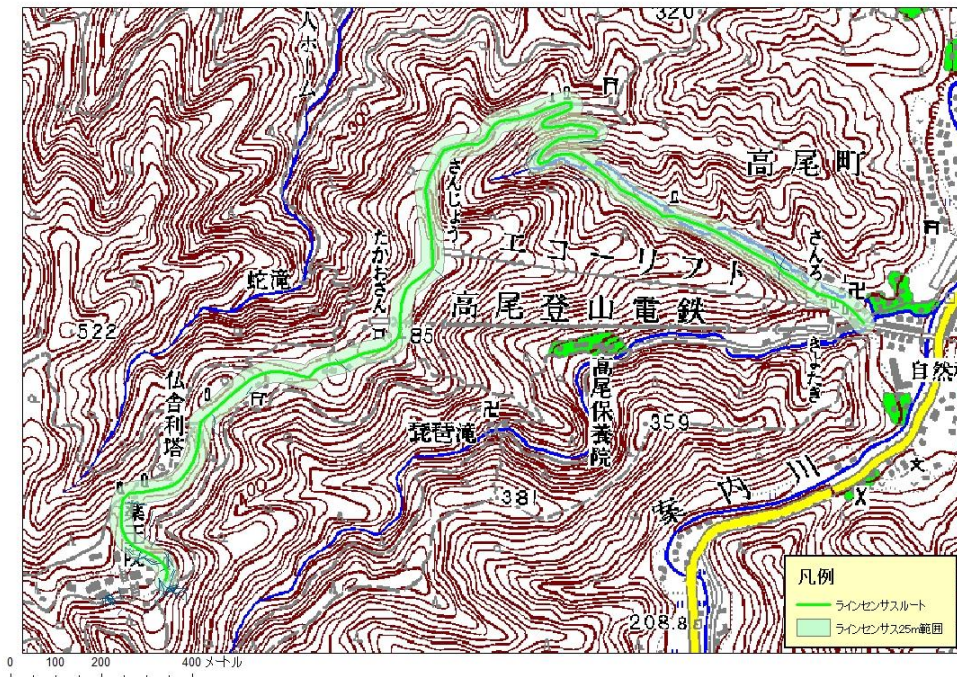


図 2 調査対象地域

②調査結果

(ラインセンサス調査)

調査 20 回によって確認できたムササビの延べ確認頭数は 78 頭、確認できた個体数は 1 回の調査で平均 3.9 頭 (0 頭 3 回、1 頭 1 回、2 頭 3 回、3 頭 4 回、4 頭 3 回、5 頭 1 回、6 頭 1 回、7 頭 1 回、8 頭 1 回、9 頭 1 回、12 頭 1 回) であった (表 2)。距離あたりの平均確認頭数は 0.77 頭/km、平均生息密度は 3.7 頭/ha であった。

表 2

調査日時	確認個体数	季節別	平均確認個体数
2013/4/13	3	春季 (3-5月)	1.8
2013/4/20	0		
2013/6/29	6		
2013/7/6	0		
2013/7/13	2		
2013/7/20	2	夏季 (6-8月)	3.3
2013/8/10	7		
2013/8/24	3		
2013/9/21	3		
2013/9/22	5		
2013/10/12	4	秋季 (9-11月)	6.4
2013/11/9	8		
2013/11/16	12		
2013/12/7	2		
2013/12/15	9		
2014/1/12	0	冬季 (12-2月)	3.8
2014/2/1	4		
2014/2/16	4		
2014/3/2	1		
2014/3/15	3		
確認延べ個体数		78	
平均確認個体数		3.9	

(定点観察調査)

調査 20 回について、出巢を確認できたムササビの延べ頭数は 28 頭、確認できた個体数は 1 回の調査で平均 1.3 頭 (0 頭 4 回、1 頭 7 回、2 頭 7 回、3 頭 1 回、4 頭 1 回) であった。平均の出巢率は 16.8% であり、季節別に見ると、春季 (3-5 月) で 2.8%、夏季 (6-8 月) で 17.6%、秋季 (9-11 月) で 26.9%、冬季 (12-2 月) で 20.1% であった (表 3)。

また、観察者数が増加した場合における出巢時間の遅延について、特に周年利用のあった巣穴周辺の定点観察調査結果に対して R による統計解析を行った結果、両要素に統計的な有意差は見られなかった ($p > 0.05$)。

表 3

調査日時	観察巣穴数	出巢個体数	出巢率	季節別	平均出巢率
2013/4/13	9	0	0	春季 (3-5月)	2.8
2013/4/20	9	0	0		
2013/6/29	9	0	0		
2013/7/6	4	2	50	夏季 (6-8月)	17.6
2013/7/13	9	1	11		
2013/7/20	9	1	11		
2013/8/10	9	2	22		
2013/8/24	9	1	11	秋季 (9-11月)	26.9
2013/9/21	8	1	13		
2013/9/22	9	4	44		
2013/10/12	9	2	22		
2013/11/9	9	3	33		
2013/11/16	9	2	22	冬季 (12-2月)	20.1
2013/12/7	8	2	25		
2013/12/15	5	1	20		
2014/1/12	9	2	22		
2014/2/1	9	2	22		
2014/2/16	9	1	11		
2014/3/2	9	0	0		
2014/3/15	9	1	11		
出巢確認延べ個体数			28		
平均出巢確認個体数			1.3		
平均出巢率			16.8		

③考察

(ラインセンサス調査)

ラインセンサス調査において、鳴き声による確認回数 61 回と目視による確認回数 23 回には約 3 倍の差が見られた。これは夜行性かつ樹林性であるムササビの調査には鳴き声や採餌音による音声確認が重要な要素であることを示唆している。

また、確認回数を季節別に整理した(表 4)。鳴き声について見ると、秋季調査が最も確認回数が多く 20 回であった。その後順に夏季調査 18 回、冬季調査 17 回と続くが、これはムササビの繁殖期、特に求愛期である 5~6 月、11 月が含まれることに起因すると考えられる。

また、目視について見ると、秋季調査が最も確認回数も多く 12 回であった。次に冬季調査の 8 回が続くが、これは落葉により樹冠部の植生が開け、個体の確認がしやすくなることに起因すると考えられる。

これらの状況を整理すると、ムササビの観察会や個体の生息状況、あるいは生態調査を実施するには 9~2 月の間の特に落葉期、かつ求愛期が鳴き声や個体の確認に適切であると考えられる。

表 4

ムササビ発見回数(全体)		ムササビ発見回数(季節別)			
鳴き声延べ確認回数	61	春鳴き声	6	秋鳴き声	20
		夏鳴き声	18	冬鳴き声	17
目視延べ確認回数	23	春目視	1	秋目視	12
		夏目視	2	冬目視	8

(定点観察調査)

定点観察調査において、春季調査、夏季調査では平均出巢率は低い傾向にあった。これは春季の場合、特に4月はムササビの天敵であるフクロウの発声が周辺であり、個体の出巢を妨げていることなどが要因として挙げられる(過去の調査中には巣立ち間もない幼鳥も確認されている)。夏季の場合、ビアガーデン開店など夜間にも人の往来や電気系統の点灯状況が多いため、出巢時間帯でも警戒対象となる要素が多分にあるためと考えられる。また、春季調査を行った日時は3~4月がメインであり、ムササビの妊娠~哺育期間であることも起因しているものと考えられる。

秋季調査では平均出巢時間は26.9%と高かった。この時期には春季や夏季のような天敵や周辺環境の変化となる要素がかなり少なくなることに起因するものと考えられた。

これらの状況を整理すると、ムササビの観察会実施には9~1月の間に特に繁殖期終盤から非繁殖期が個体の出巢の確認に適切であると考えられる。



(影響度)

観察による個体への影響を評価するため独自に定めた3段階の影響レベルは、調査者が確認した個体への、観察圧によるムササビの行動に対して一定の評価基準を加えるものとして有効であると考えられる。影響度が高いデータについて、それにとまなう個体の観察記録を表5-1、表5-2に整理した。

定点観察調査の結果について、出巢時間と観察者数には有意差は認められず、具体的な影響は示唆されなかった。ただし、今回の調査ではデータ数が不足しており、今後データの蓄積が求められる。

また、全体としての傾向は見られなかったものの、観察データ個々を見ると、ライトの点灯に対する一定の忌避行動(顔を伏せる、静止する、巣穴に戻るなど)が確認されており、これは無視できないものである。これらの動向は影響度と組み合わせて見ることで観察圧による影響をより具体的に表現することができると考えられる。

表 5-1

調査日時	調査項目	確認地点	確認時間	観察者数	周辺の状況	備考
2013/4/20	定点観察調査	St.2	18:22～18:48	1		観察者を注視した後、巣内方向へ顔を向け、出巢時まで終始顔を背ける。
2013/7/6		St.2	19:15～19:44	5		ライト点灯に対し穴に2度引っ込み、その後出巢。
2013/7/20		St.2	19:36～19:40	1	一部ストロボ撮影	外を見ていたが、観察者のストロボ撮影連発により巣内にひっこむ。
2013/7/20		St.2	19:54～19:54	1	ライト点灯無し	滑空した個体が「キュルル」と警戒声を発する。
2013/8/10		St.2	19:10～19:10	7	うち4名少し喋る	ストロボ撮影によりひっこむ(周囲を見回し終始警戒)。
2013/8/10		St.2	19:13～19:13	7	うち4名少し喋る	ライトの連続点灯にひっこむ。
2013/8/10		St.2	19:21～19:33	7	うち4名少し喋る	顔、体を出し警戒。
2013/9/21		St.3	18:37～18:38	8	登山者多くやや騒がしい	調査者をしばらく注視した後、点灯を避けるように葉陰に隠れ、「ジュルル」と通常声を発する。
2013/10/12		St.2	17:37～17:37	10	騒がしい	斜面下へ滑空。
2013/10/12		St.3	17:36～17:36	11	騒がしい	斜面下へすぐに滑空。
2013/11/9		St.2	17:05～17:07	25		観察者を注視した後、一旦顔を背け、穴に戻る。
2013/11/9		St.2	17:09～17:11	25		しばらく顔を出した後、穴に戻る。
2013/11/9		St.2	17:11～17:11	25		穴から出た後、付近の窓縁に移動し、すぐに滑空。
2013/11/16		St.1	17:24～17:24	1	登山者非常に多く騒がしい	通常声3～4s程度発声(大音量)。
2013/11/16		St.1	17:27～17:31	1	登山者非常に多く騒がしい	ライトから顔を背け、樹冠部へ移動。途中通常声を発声し、斜面下へ滑空。
2013/11/16		St.2	17:00～17:04	7	会話控えるが個体へ長時間ライト点灯	顔を出し、観察者を注視。斜面下へ滑空し、着地先で通常声を発声。
2013/11/16		St.2	17:38～17:40	1		大本坊の離れで通常声を発声。ライト点灯を嫌がるように顔を背ける。
2013/1/12		St.2	17:38～17:39	5	うち4名は終始個体ヘライト点灯。	顔を出す、すぐに引っこむ。
2013/1/12		St.2	17:42～17:52	5	うち4名は終始個体ヘライト点灯。	顔を出し、観察者を注視し10分程度フリーズ。その後斜面下へ滑空。
2014/2/1		St.2	17:46～17:56	1		ストロボ撮影に顔を伏せた後、調査者を注視、その後滑空。

表 5-2

調査日時	調査項目	確認定点	確認時間	観察者数	周辺の状況	備考
2013/8/10	ラインセンス		19:38～19:51	5		下方を見回しその後滑空(とまっている際ライトに顔を背ける)。
2013/11/9			17:58～18:00	3		枝を伝う個体。明かりを避けるように樹冠に移動し消失。
2013/11/16			19:21～19:22	3		広葉樹上で採餌する個体。観察者に気付く、樹冠部へ移動。尾根上部へ滑空し消失。
2013/11/16			19:30～19:35	3		調査者に気付くしばらく止まり、その後樹冠部へ消失。
2013/12/7			18:06～18:09	10		ライトの点灯、観察者の接近に対し逃避するように枝上へ移動。観察者頭上にて警戒声を発したので観察を中止。
2013/12/7			19:30～19:33	100		大多数の観察者に対し警戒、5分以上フリーズ。途中観察者らから少し離れ毛繕いをする。隣のスギへ滑空移動し、枝上へ消失。
2014/3/2			19:40～19:40	2		調査者3名の通行の際、スギ大木頂部付近にて警戒声を発する。

3 ムササビの普及啓発活動への利用

①ムササビ観察会開催とプログラムへの調査結果運用と検討

(観察会への運用)

本調査研究から得られたデータの運用方法について、調査結果として得られた統計的な傾向、個々のデータなどを生かし、ムササビの観察マナー普及啓発活動の一環として8月、12月の年2回でムササビ観察会を開催した。各観察結果とそのデータの運用方法を以下の点に着目して整理した。

表 6 観察会への調査結果運用事項

No.	調査項目	着目項目	観察会への運用
1	ラインセンサス調査	確認個体数	観察地となる登り口から薬王院境内の間に見ることができた個体数や確認頻度などの調査結果をプログラム中に提示することで、観察者のムササビ遭遇に対する期待度を向上させ、全体のモチベーション向上を促す。
2		確認頻度の高い箇所	観察ルート上での出現頻度の高い箇所を選定し、下り観察途中での短時間定点(約3~5分程度)として利用する(全体での観察可能性を高める)。
3	定点観察調査	観察対象巢の出巢率	定点観察を実施する薬王院境内における各巢穴の出巢率を明確にし観察会で対象とする巢穴の選定を行う(より出巢可能性の高い巢穴を把握することが可能)。
4	ラインセンサス調査 定点観察調査	影響度	調査時の観察の仕方を詳細に把握することで、観察会において何に注意すべきかなど注意点や観察マナーをより具体的に示す。また、各調査時季における周辺の状況を情報として反映する。

(検討結果)

ラインセンサス調査の結果について、確認頻度の高い箇所への抽出は、観察会の特に下り観察時において非常に有益な情報として利用することができた。また、観察会において出巢の確認は重要な場面ではあるが、その後の移動観察時の動向により終了間際の雰囲気作りに大きく影響するため、この確認情報は個体との遭遇確率を増加させるために重要であった。

定点観察の結果について、出巢の可能性が高い巣穴を特定することは観察会の目玉ともなる出巢観察において非常に重要である。そのため、各巣穴の年間での出巢状況を把握することは、観察会において重要性の高い場面をより充実したものにするために非常に有効であった。

ラインセンサス調査、定点観察の結果に利用した影響度について、その数値と観察内容を合わせた結果を具体的な事例としてプログラム内で表現することは、ムササビの観察マナーを普及啓発する上でより明確な情報を提示できるため非常に有効であった。

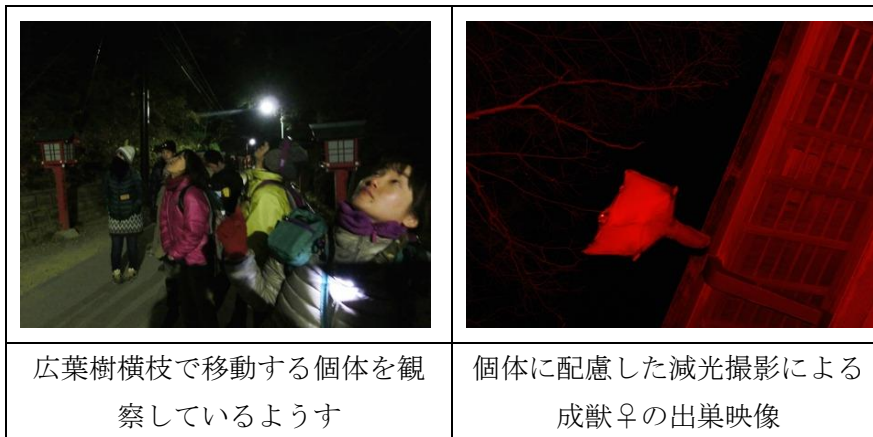


写真 1

4 提言

①観察会のあり方について

これまでの高尾山におけるムササビの観察会は、ムササビそのものを観察することに重きを置いており、かつ多くの人が一度に観察できる状況を想定していた。しかし、今回の調査中にも数多く確認された個体への配慮を欠いた観察方法は、古くから生息している高尾山に生息するムササビの生態及び生息環境に大きな影響を与えかねない、あるいは与えているものと考えられる。

今後の観察会では、ムササビという種の存続も踏まえた上で、減光措置や静かな観察、少人数制など個体の動向に大きな影響を与えないような一定の観察マナーを持って実施すべきであるとする。特に重視すべき要点については本調査研究で作成した「ムササビ観察マナーパンフレット」をご参照いただきたい。

②観察会の主催者に

今日各所で行われている多くの野生動物の観察会には、中には生物へ明らかな悪影響を与えかねないものも多く見受けられる。

本調査研究の成果として、今後行われる野生動物に関与する企画には、十分な知識と、かつそれをうまく活用し野生動物の生態に配慮する考え方を浸透させていってほしいと考える。

5 謝辞

本調査研究を進めるにあたり、御手洗 望氏、重昆 達也氏には全体の計画、とりまとめについて多くのご指導をいただいた。また、現地調査には、竹田 仙比古氏、鈴木 麻衣氏、東川 翔太氏、小山田 佑介氏、東京環境工科専門学校の学生、観察会には森田 佑介氏、草出 諒氏、データ解析には帯広畜産大学大学院の畠本 樹氏、他多くの方々にご協力いただいた。この場を借り改めて感謝申し上げます。

参考文献

- 吉田真也・安藤元一・繁田真由美・荘司たか志・小川博 2011 ラインセンサス調査と出巢率調査によるムササビ *Petaurista leucogenys* の生息密度推定 森林野生動物研究会誌 36号
- 内田哲夫・倉持武彦・君塚芳輝 2003 環境教育、特にフィールドマナーの視点から捉えた多摩川の保全に関する研究 とうきゅう環境浄化財団 No.132
- 安藤元一・倉持有希 2006 ムササビ *Petaurista leucogenys* の音声コミュニケーション 東京農大農学集報 53(2) 176-183
- 岡崎弘幸 2003 多摩川流域におけるムササビの環境選択に関する研究 とうきゅう環境浄化財団 No.143
- 繁田真由美・荘司たか志・重昆達也・安藤元一 2009 東京都町田市におけるムササビ孤立個体群の生息環境 森林野生動物研究会誌 34号
- 繁田真由美・繁田祐輔・田村典子 2010 生息痕跡によるムササビの生息地利用の解析 森林野生動物研究会誌 35号
- 木村剛志・安藤元一・天野卓 2005 ムササビ (*Petaurista leucogenys*) の分布密度における過去 30 年間の変移 東京農業大学農学部野生動物学研究室平成 19 年度卒業論文
- 川道武男 2010 ムササビの食性 (解説) リスムササビネットワーク No.25
- Brian J Stafford・Richard W. Thorington・Richard W. Thorington Jr.・Takeo Kawamichi 2002 Gliding behavior of Jaoanese giant flyng squirrels (*Petaurista leucogenys*) Journal of Mammalogy 83 : 553-562
- Minoru Baba・Teruo Doi・Ono Yuiti 1982 Home range utilization and nocturnal activity of the Giant flying squirrel,*Petaurista leucogenys* The Ecological Society of Japan 32 : 189-198

安藤元一・白石哲 1985 ムササビにおける外部形質と行動の発達 九州大学農学部学会雑誌 39 : 135-141

安藤元一・白石哲 1983 ムササビの巣と造巣行動 九州大学農学部学会雑誌 38 : 59-69

川道武男 1999 ムササビの年2回の交尾日に影響する要因 哺乳類科学 39 : 165-168

押田龍夫 2001 北限のムササビ-青森県三戸郡におけるムササビの観察記録- リズムササビネットワーク No.10

青木雄司・重昆達也・繁田真由美・柳川美保子・蓮田弘美・山口尚子・竹内時男・小林俊元・佐藤健・二宮孝子・早川広美 2006 神奈川県におけるムササビの分布 神奈川自然誌資料 27-40

安藤元一 1999 日本における人とムササビの関わり 哺乳類科学 39 : 175-179

安藤元一 2005 樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査法の検討 哺乳類科学 45 : 166-176

川道武男 1996 日本動物大百科 哺乳類 I 平凡社

S.D.Ohdachi・Y.Ishibashi・M.A.Iwasa&T.Saitoh 2010 The Wild Mammals of Japan SHOKADOH BookSeller

岡崎弘幸 2004 ムササビに会いたい! 晶文社出版

ムササビ観察会速報！！ ～高尾の天狗、ムササビに迫る～

2013. 7. 13

夏休み間近ということで、第5回ムササビ観察会を開催させていただきました！！
つきましてはスタッフを代表致しまして、井上が会報誌を発行致します。
とうきゅう環境財団より助成を受け、調査研究を踏まえていることもあり、今回は高尾山を舞台にしたムササビに焦点を絞り、食生活、繁殖行動、体の仕組みなど複数の視点からその生態に迫りました。

《ムササビって？》

そもそも「ムササビ」とはどういった生物なのか、生物体系の中で彼らの位置づけを知ります。



《滑空の秘密…》

ムササビはどれくらい飛べるのか？そのイメージを膨らませるべく…算数の公式に乗っ取って皆で計算！！



$$\text{滑空距離(m)} = \text{樹高} \times 3.3$$

《ムササビの食事》

ムササビは一体何を食べているのか？季節と照らし合わせてその食生活を覗いてみました！



ムササビの糞の中身って…
ワラなの！？
↓
植物が好きなんだ！！

《恒例！お茶会と不思議なフィールドサインの観察》

暑い中の登山にはクールダウンは必須！！というわけで冷たいものを飲んで休憩～一緒にムササビを取り巻くいろいろな動物のフィールドサインを観察！！



《いよいよムササビ観察！！》

観察会目玉プログラム、ムササビの出巢観察です！

出るか出るかと皆ワクワクドキドキでした！！そんな気持ちに応えてくれたのか、おそろおそろ顔を出して、ゆっくりと出掛けて行きました～



静かに観察してくれて
ありがとう♪
これかれもマナーを守って
観察してください！！

☆観察マナー☆

- ・ライトには赤色フィルムを必ず装着！
 - ・赤色フィルムをつけても 10 秒以上の照射は控えて！
 - ・できるだけ静かに…静かに…
 - ・可能ならハロゲンライトを使うと Good！！
- とにかく彼らの生活を邪魔しないように、観察しましょう (^O^)/

助成金取得という一つの節目に迎えた第5回ムササビ観察会。今までの研究調査の結果や得られた情報を生かし、その生態を肌で感じてもらうためのプログラムを組ませていただきました。今後も、皆様に野生の動植物の存在の意味や重要性を肌で体感してもらとともに、大人も子供も童心のままに“生き物”に触れ合っていける場を作っていきたいと思います！

では、次回も皆様にお会いできることを楽しみに…See you next time ☆＝

自然観察活動チーム Wild Lives Watchers

代表 井上 太志

TEL : 090-9887-1787

E-mail : cometonbo@gmail.com

ブログサイト : <http://macafusca.blog.fc2.com/>

「Wild Lives」 ～野生の命～

※当事業はとうきゅう環境財団より助成を受けて活動しております。

ムササビ観察会速報！！

～調査から得られたものは、ムササビの今～

2013.12.8

月は師走、今年という年を終える前に、第6回ムササビ観察会を開催させていただきました！

つきましては、スタッフを代表致しまして、井上が会報誌を発行致します。

3年目という節目を迎えたこの観察会。8カ月に及ぶ調査から得られたものは？
様々な知見とアクティビティを通して、高尾山のムササビの“今”に迫りました。

【ムササビとは…】

ムササビがそもそもどういう動物なのか？人の暮らしの中でどういう存在だったのか？
ちょっとした道具でその体の仕組みをまずは体験してもらいました！
少しわかりづらかったかな？…汗



このへんがいわゆる
皮膚ですね♪



こんな感じで…
バビューン！

【ムササビを囲む様々な自然達！】

ムササビの生活史の中で、一体どんなものが関わっているの？

その生活は私達にも見えるのかな？

彼らの残した不思議な痕跡、彼らを囲む多くの自然達を探りました！



このケクケクが
ひっかき痕！？

ムササビも大好き、
これがフナです！！
と森田くん♪



皆が熱中！
これはキジョランでした！
ガガイモというつる性植物で、液り移動をする千〇ウの
大好きな植物なんだそうや…

【ムササビ観察】

夜はいよいよムササビ観察！かなり冷え込む中、皆でムササビの巣穴観察です♪
今回は参加者の皆さんが驚くほど静かに観察してくれたおかげでムササビもちゃんと顔を出してくれました！！



他にも、ムササビの糞や樹洞なんかを見つけるゲームや、恒例のお茶会なんかもさせていただきました。

レモネードは身も心も温まりました♪

今回はスタッフも驚くほどにムササビがたくさん見られました！

これは参加者の皆様が、しっかりとマナーを守り、彼らの気持ちに立ってゆっくりと静かに観察してくれたおかげと思っています！！

ムササビも普段通りに振舞ってくれたのだと思っています。

心から、ありがとうございました♪

せっかくなので、今回見られたムササビと同じような写真、今回は入っていなかった巣穴からの顔出し写真をお届けします！！



そして、これからまた観察に行ってみたいと思った皆様！
今回お伝えした 3 箇条、大切に守って、ムササビにも優しい観察をよろしくお願い致します。

☆静かに、ゆったりと観察しよう！

☆ライトは明るすぎず、長時間当てないようにしよう！

☆落ち着いて、見守るように観察しよう！

活動3年目という一つの節目に迎えた第6回ムササビ観察会。今までの研究調査の結果や得られた情報を生かし、その生態を肌で感じてもらうためのプログラムを組ませていただきました。今後も、皆様に野生の動植物の存在の意味や重要性を肌で体感してもらとともに、大人も子供も童心のままに“生き物”に触れ合っていける“出会いの場”をご提供させていただきたいと思います！

では、次回も皆様にお会いできることを楽しみに…See you next time ☆＝

自然観察活動チーム Wild Lives Watchers

代表 井上 太志

TEL : 090-9887-1787

E-mail : cometonbo@gmail.com

ブログサイト : <http://macafusca.blog.fc2.com/>

「Wild Lives」 ～野生の命～

※当事業はとうきゅう環境財団より助成を受けて活動しております。

高尾山におけるムササビの生態研究と普及啓発活動への利用

(研究助成・一般研究VOL. 36—NO. 213)

著 者 井上 太志

発行日 2014年11月1日

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>